

【編集後記】

◇予定より発行が遅れましたが、22号をお届けします。
今号から、本文の紙質をアート紙に変えました。

長年、虫に関係した生活をしてきて、時間の流れの持つ意味を、最近、ひしひしと感じるようになりました。かつての採集地を久しぶりに訪れた際、自然環境の変貌ぶりに驚かされることが少なくありません。それは、人工による環境破壊ばかりではなく、むしろ植生の遷移や温暖化の影響といった意味合いのもので、それに伴い、昆虫の発生状況や虫の顔触れも、以前と比べて変化しているように感じられます。一方では、自らが年齢を重ねたことで、時間的余裕がなくなり、体力的、気力的な衰えも感じざるを得なくなりました。

今こそ、かつての但馬の自然の様子を、文章やデータ、写真などを使って残さなければと思います。そうしないと、これまでやってきたことが生きてこないでしょう。さらに、現在の姿と比較することによって、自然がどういう方向に進もうとしているのか見えてくるでしょう。

そういう観点の“昭和〇年ごろの但馬の採集地”とか“但馬の採集地の過去と現在”というような、昆虫にからめた内容の記事を取り上げたかったのですが、準備不足もあり、今回は果たせませんでした。一部の方からはそれに類した原稿をいただいています。もう少し肉付けをしたり構成を工夫して、次号で実現させたいと考えています。みなさんからの投稿を期待しています。

何気なく接している但馬の自然も、刻々とその姿を変えつつあります。みなさん、虫にかかわりながら、どの程度、このことを感じているのでしょうか。（谷角）

◇昨年に引き続き、発行が遅れたことをお詫びいたします。早くから原稿をいただいていた著者の方々、ご心配をおかけし、申し訳ありませんでした。

木下さんから久しぶりに原稿を頂戴しました。少年の日のあこがれ、未知の土地でのとまどい、木下さんの人柄、いろいろなものが伝わってきて、採集紀行文の楽しさを満喫しました。私たちにとって、虫を採集に行くことの楽しさがすべての原点だと思います。「虫採りに行きたい！」という思いに駆られる、そんな楽しさが伝わってくる文章を待っていました。

さて、そういうふうには虫を採りに行って、「こんな虫が採れたことをみんなに知らせたい」というのが、同好会誌の出発点だと思います。そのためには誰が見ても、いつ、どこで、なにが採れたのか、そのことがはっきりとわかるよう、採集データを客観的に記載して下さることを、お願いいたします。（石田）

◇就職で、但馬からますます遠ざかることになりました。数年前までは、兵庫県に就職するものと、自分でも信じて疑わなかったのですが、周囲の環境が大きく変わるなかで、価値観もずいぶん変わりつつあります。また、いつまで経っても積極的に勉強しなかった私も、必要に迫られてオサムシの交尾器を抜き、あるいはネクイハムシの交尾器を顕微鏡でのぞくようになりました。それに、信州のブナ林の虫の多さに驚いたり、八ヶ岳で針葉樹の香りに包まれてナガゴミムシをねらったり…。

いずれ、あちこちでの経験で身につけた勘を、但馬で試す時がやってくるかもしれません。（永幡）

IRATSUME No.22

1998年8月31日発行

発行者：但馬むしの会

〒669-6801 兵庫県美方郡温泉町

黒井和之方

編集者：谷角素彦・石田達也・永幡嘉之